

風韻

第 9 号

(一九六九年度)

神戸大学風韻会



卒都婆小町 昭和43年11月24日 於大槻能楽堂

風韻 第9号 目次

大曲卒都婆小町演能を了えて.....	宇治 正夫	1
道の深さについて.....	荒川 祐吉	3

先輩便り 5

西尾 雄一 米花 稔 尾島 洋三
 古屋 清子 安藤 幸雄 戸田美代子

▶市大・一橋大の紹介と神戸大の現状◀

市大能研を語る	矢島 勝	11
一橋観世を語る	阿左見隆雄	12
風韻やら謡やらについて	梶川 孝子	13
サークル論	河野 豊	14

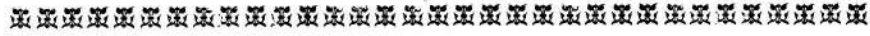
誌上研究室

◦ 民衆文化と能の成立.....	今宿 純男	16
◦ 「ガクレン」のこと	西村登志子	21

思い出の記 22

向浜 幸雄 湯朝 憲之 沼田真弓 清見 嘉朝
 辻 皓一 中川 慎吾 吉留敦子 福山 和子
 野田 和則 高橋 雅晴 芥川美和子

あしあと		33
昭和44年度新幹事紹介		35
幹事長就任のあいさつ	川辺 利招	35
編集後記		36



秋季発表会



合宿

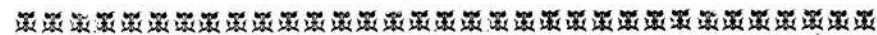
大曲卒都婆小町演能を了えて

宇治正夫

風韻会は昨年に五十周年記念の諸会を了り今年私が卒都婆小町（一度之次第）の大曲を再演させて頂きましていろいろと御後援ありがとうございました。

私は数年前から足痛を起して暇ある時は養生に努め殆んど良くなっておりましたが昨年以來少し養生の時間に恵まれず過労の処へ何年振りかの流感に罹りまして高熱を出しましたが幸にして卒都婆小町の数日前に熱は下りました。時々激しい咳が出て痰も切れずお医者様はせめてもう二三日寝て居るようにと止められました。何分大曲の事故御後援の方々や多方面に御迷惑をおかけしてはと敢然と舞台上に立つ事にしました。お蔭様で舞台一の松へ着いた時分には一切の雑念も去り自分乍らに力一杯勤められた事は有難い事で御座いました。

この境地と申しますと甚だおこがましいのですが私五十年の体験により深く感じました事は誰でも得意の絶頂にある時はその人としてのその心掛けは大抵よろしくないと思うのです。それが私の場合ですと健康に申分なく声も良く出る時はどこかにつまづきが出来又は大なる失敗を招く時であります。これを廻り下げて考えて見ますとうまくやろうとか上手に見せようとか不純な欲望が出る為であります。この日の私は足も余り良い方



ではなく感冒のため何時咳が出て来るか声がつまるか足がケイレンしてガクンと倒れるかも知れない。例えば沢山の伏兵がどこに居るかも知れない戦場である。これを恙なく切り抜ける為には何よりも心を落着けなければならぬ。今日出る声の範囲内で心と力を充実させなければならぬ。足の痛むガクンと来る境界線の少し手前の処で行動しなければならぬ。これだけの絶対的制約の中で然も十二分に自分が没入しなければならぬのです。自分の為ではなく、成不成は大勢の私の声援者の心をいためるか喜んで頂くか……。私は目を閉じて一心に念じました。幕を上げ右うけて直す。次第(習ひ)の手にうまくはまらない。運びかけると今にもガクンと来そうだ。一心に躰下丹田に力をこめて慎重に運びやると三ノ松で休息の手になり予めかくあらんかと休息の間を長くする事を囁子方にも頼んであったので胸杖をして目を閉じてほんとに心から一生懸命に神を念じました。漸く深い覚悟も出来ましたので到って慎重に然もサラサラと一の松に迫りつき次第を謡い出しますと段々と身も心も落ちて来るのを感じました。舞台に入り道行の謡も済んで「これなる朽木に腰をかけて」と舞台の中の床几を見てハッとしました。床几の位置が違うのです。この床几にかける時は又大変なのにズツと前へ出て居る為又目をして一心に神を念じ一入の心を足と心眼にこめて床几に迫りつき足のうしろに目をあける様にしてやると無事に腰かける事が出来ました。あとはヌラスラと五十年の体験を生かして私の全精神と力を集注する事が出来一度も咳も出ず倒れる事もなく大役を勤める事が出来ました。これは目に見えぬ神の御力によるもので、また偏に皆様の御声援の賜と深く感謝申上げて居る次第であります。

(昭和四十三年十二月)

道の深さについで

副会長 荒川祐吉

この秋、宇治先生の御蔭で、私のような未熟ものが、「道成寺」を披く機会を与えられた。もともと稽古を多忙を理由に休んでいたような次第であるし、そのうえ続けて稽古していた頃にも、せいぜいのところ一応の節廻しができるといった程度の、きわめて安易な段階に、これもあくまで趣味だからという屁理屈をつけて安住していたので、とてもこのような機会が私の生涯にあるうとも考えなかつたし、第一このような機会を願うことはあまりにも不遜であるとかたく考えていたのである。しかし、先生に強く叱咤激励され、必死の思いで、ただただ先生の御指導のみを頼りに稽古をはじめた。

元来自分の狭い本職以外のことについてはわりあいのんきに考える怠惰なところもある私であるが、こうなつては今までのようなヨイ加減ではすまされぬ。先生の眼前で先生の謡をきいた通りに自分でやってみるわけであるが、自分でこれでよいと思つても何度も何度も直される。結局どうしてよいかわからなくなつた頃、先生から一言こうすればよいという御指導を頂ける。と、今迄自分自身ではどんなに考えても解らなかつたことがハッキリと理解できるよう

になる。こんな体験を幾度となくくりかえした。それと共に今度は、他の方々の謡をきいても、今まで分らなかつた特徴が実によくききとれるようになっていた。いままでの安易な状態に安住していたときには全く閉ざされて、私自身にとっては存在しなかつた新しい、そしてヨリ高次の世界が自分のものとなつていく。私はある特定の曲をどう謡いこなすかなどということよりも、このような新しい世界が、先生と弟子との交渉の場から弟子に与えられていく、そのこととのスバラしさはこの世で最高のものの一つだと体得した次第である。これこそが芸道であり、「道」を求めるものに与えられる幸せであり、そして求めないものには永遠に閉ざされた宝なのだと思う。

今、神戸大学も、一部の思いあがつた狂気の集団によってかき乱され、それが正気の集団をも犠牲にして、狂信の価値体系をおしつけようとしている。私にいわしむれば、彼等はあまりにも憐れな存在である。彼等は一体何のために大学へきたのだろうか。私の考えでは、真の大学は学問の探究を通じて教授と学生がふれあい、両者の真剣な交渉、学生側における必死の真理探究への熱情と、それに

答えようとする教授側の真剣なぶつかりを通して、教授はその研究に刺激を得、学生は自からの人格を高めていく場であればならぬ。未熟で極度に歪曲された「思想」とやらを、未熟な頭脳で絶対化し、あらゆるものを否定してかかるところに、一体如何なる「創造」があるというのか？「創造」などは幻想であるし、自から「神」になるような姿勢から生れるものは空虚な沙漠でしかありえない。これは「道」を求めようとする姿勢とは真向から対立するものである。「道」はそれを求めようとするものしか与えられないし、しかもこれは求め方に応じてしか与えられない。そこに道の深さがある。私は大学とはこのような道を求める者の集団を实体とする社会でなければならぬと思っている。クラブ活動は、このような求道の幅を広げ、抱擁力と柔軟性に富む幅の広い人間をつくりあげるといふ効果をもっている。どのようなクラブであれ、そこに精力を打込んで何ものかを求めていく、その過程にこそ人生の意義が秘むのではないだろうか。

さらに私はもう一つの問題性を最近強く感じている。というのは、最近の学生諸君の「求め方」の変化である。端的に云えば、「内」へ求めるのではなく「外」へ求める態度である。リスマンという「社会学者」はこれをリーダー的人間といひ高度産業社会の産物であるといふ。ニイチェはこのようなタイプを「弱者」であるといひ、行動の基準を「外」との関係におこうとする考え方を「弱者の思想」として排斥している。これらの認識の妥当性はともかく、私はニイチェの考えに同感である。学園における狂気の集団の行動は

そのいみで弱者の行動である。真の「創造」は「内」への探求からしか生れてこない。われわれ人類に真に創造的な賜りものをしてくれた過去幾多の天才達は、すべて皆、「外」との関係にとらわれず、自からの「内」なる独自の軌道によって行動した人達であった。彼等はそのいみで社会的適応性を欠いていた。

ともあれ謡曲はそれを楽しむものにこのような「内」への探求のよるこびを与えてくれると共に「外」への調和の精神をも学ばせてくれる。しかし私は自分の経験からいって、稽古の醍醐味は正に「内」に向って道を求め、その道の深さを絶えず体得しつづけるところにこそあるといわざるを得ないのである。



先輩便り

本来無一物

旧五回 西尾雄 (西尾商店)

先日大丸で山田無文師の「本来無一物」の書を拜見した。これは卒塔婆小町にも引用せられて居る禅の元祖の慧能の有名な偈の一句である。

禅の達磨大師より数えて五祖の弘忍(六〇一―六七四)が次の法嗣を決定するに当り、高弟の神秀が「身是菩提樹、心如明鏡台、時勤拭、莫遺惹塵埃」―吾々の身体は悟を映す明鏡をのせる台の様なものである。常に拭いて塵を止めぬようにしなくてはならぬ―の偈を発表した。之に対し弘忍の非公式の弟子の慧能が反駁して「菩提本非樹、明鏡亦非台、本来無一物、何処惹塵埃」―菩提の本だとか、明鏡の台とか、そんなものは元来悟りにあるわけがない。本来人間や天地の間には恒久不変の物と云うものは何もない。従って何もないのに塵埃のつく筈がない―の偈を提出して第六代祖師たることを許された。即ち神秀の修行の心掛態度を示したものであり、悟りに達した心境そのものではないのである。卒塔婆小町では小町とワキ僧との問答にたくして、万物本来の真相は無一物の真理を説

今回は旧制五回卒業生の米花稔教授と西尾雄一氏、学集を立たれて未だ一・二年の十五、十六回卒業生諸氏四名、計六名の方々から便りをいただきました。このたびは編集部の方からは特に内容を限定せず、雑感という形で書いていただきました。米花教授は謡と研究生活について、西尾氏は能と仏教思想について又、社会人フレッシュマンの十五、十六回生の話先輩からは、社会人としての新鮮な印象を送って戴きました。

仏教が日本の中世の思想文学に及ぼした影響は実に大きい。能の多くのものが源氏物語、平家物語等中世の物語に典拠している関係上、仏教の影響なしでは居られない。特に世阿弥は此等物語の登場人物の内、不幸に死んだ人達又は賤しい身分の人達の大きな苦を書いている。仏教では人生を苦であると判じ、その苦の原因を欲望に求めて欲望の消滅を説いている。卒塔婆小町では傲慢の美人のなれの果を描くのか、或は差別観と平等観の宗教的論議に主題をおくのか判明しにくい点もあるが、いずれにしても仏教的な智識なくしては理解しにくいと思われる。

近頃思うこと

旧五回 米花 (神戸大学経営学部教授)

此頃は、すっかり謡うことに御無沙汰している。それを思い出させるように教官の謡のつどいと、学生諸君の風韻会の機会だとかに、呼び出しをかけて下さるのが藤井教授である。小生は、それを簡潔点呼と称している。今の若い人には耳新しいことばであるが、これはかつて軍隊で、現役をひいたものとか、補充兵など民間にい

るものに対する定期的な召集点検のことである。簡関点呼は、従って当時これをうけるものには、あまり有難いものではなかったのである。謡う集いに、わざわざ親切に声をかけてくださる藤井教授のお呼出しを、このようになぞらえるのは、礼を失したことで申し訳ないと思っている。しかしまた、謡うひとときが楽しいことは、いまもかわらないのであるけれども、日常雑事におわれていると、平素練習もせずに、そのような集いに出席することが、心理的にははかれるのもわかって頂けるのではないかと思う。その時に勇をおこして出かけてゆくには簡関点呼の令状があった方がよいのである。その意味で有難いと思っているのである。今後ともせいぜいつとめたい気持ちである。

小生の謡い歴は、学生時代の風韻会三年と、卒業以後数年の継続、さらに戦後断続的に二三年が、正規のものといえよう。もう一歩という手前で、現役をおりて、中途半端な謡に墮してしまつたというところかも知れない。器用貧乏ということばがあるが、小生別に器用と自覚しているわけではないけれども、比較的声量に恵まれていたことが、かえって地道なけいこを透徹できなかった要因と反省している。近頃は、あに謡の場合のみならんやと、研究生活の日々にこそ、器用貧乏をいましめ、どんくさあゆみ方をいつまでも忘れないでいたいものと自戒している。これこそ謡のおかけであるう

雑感

J15 尾 島 洋 三
(安田信託銀行)

編集子より何か書けとのこと。卒業以来、一年半とちよつとのうちにはやべんを持つことの少くなつたこと、文章らしきものを書く

ことの少くなつたことを痛感する次第。私の雑感はこの様なところから始る。風韻会が「はやこのことばがなつかしきものとなりつつあることに一種のさびしさを禁じえない。未だなつかしいというほどの時の経過も見ないのに……」

しかし思えば卒業以来、いろいろのことがあった。何かあわだしく落着かぬうちに、何となく過ぎてしまつたのが実感だ。この間、謡曲の練習をしたのが果して何回だろうか？ 思えば数える程にしかないこともさびしいことである。

勤務先でも私が入社してからクラブを結成し、京都の先生を招いて、稽古を始めたものの、銀行というところ、なかなか転勤も多く、人のそろいにくい所、又、仕事の関係でなかなか全員が同じ日時に集ることのむづかしい所。又、自身に聞かせば、学生時代宇治先生に薫陶を受け、助んだ身には、新しい先生は何とも物たりなく力の入らぬことおびただしく、何だか自分の謡がスポイルされそうで、素直に習う気になれず、そんなこんなで幹事の私始めとして足が速のくことしきりで、月に一度やれば上出来という有様。

学生時代毎日日力一杯大声をはりあげたこと、いとなつかしく、それにつけてもあの大鏡の部屋を思い出す次第。

卒業した昨年の秋は父をなくした。この父、宇治先生の古弟子で、謡は決してうまい方ではなかったが、しんから謡の好きなオヤジだった。私が謡を知つたのも、又、宇治先生の教えを受ける様になつたのも、この父のお蔭。お通夜の晩には型破りに兄ともども謡の法要をしてやったのだつた。

卒業して二年目今年秋は妻をめとる。この妻、かつては風韻会の一員。これ又、謡は決してうまい方ではなかったが、やたらと好きな奴で、宇治先生の謡、仕舞にはれこんでおつた。これでも何かの縁。

小生―これ又、謡はお世辞にもうまいと言えたものではないが、

好きなことにかけては無類と自負。

なにやかやと、やはり私の生活には、謡がつかず離れず関係する様だ。

風韻会、風韻会、何度聞いても響きのよい、さわやかな韻ノ私も思い出しては細々とでも謡を続けてゆくつもり。風韻の同窓諸君ノお互いに頑張りましたよ。お腹に力を入れて、一步一步前進ノ

尾島さんには昨年十一月、教育学部十六回卒業生浅瑛子さんと御結婚されました。

雑感

L15 古 屋 清 子
(親和学園教諭)

大学を卒業して二年、謡曲や仕舞から遠ざかって二年たちます。母校に戻って教鞭を執る自分を、ふとふりかえってみることがあります。学生生活と社会生活との大きな違いに初めはとまどいがちでした。しかし同じ卒業生仲間、異なる社会に出て行った友の話から教育の世界にいることの充実感を身を感じ、何ともいえずうれし

い、心持になることの多いこの頃です。

授業を終え廊下に出ますと、

ああ、まずかったな。

あんなものかな？

例をあげた方がよかつたのでは？

よく理解できただろうか？

まあ、いいさ。

といったこともごもの思いが次々に浮かんでまいります。そして職員室までつづきます。二年目半ばを過ぎた今も、初めの頃ほどではありませんが、やはりその時間ごとの出来具合が気になります。人間を相手とするだけに微妙なことの上ありません。教師にとって

も生徒にとつても二度と展開することのない場面、一度きりのものなんだ、と思えば一層一回一回の授業を大切にしたいという気持ちがわいて来ます。授業において、また授業という場をはなれても、先生が生徒に接する際、根本的に重要な問題となるのは、先生の人間性そのもののように思います。生徒が接するのは何も先生ばかりではありません。しかし私の経験からいっても教える立場にある者の人間性は、相手に与える影響からみても非常に大事な問題だと思つたのです。ものの考え方あるいは性格、これら種々さまざまです。人によっては好き嫌いもあり、思想的に全く反対だとか、賛成できかねる、といったことは当然のことですが、それらを越えて、人間性は大きな要素だと思つた。自分に厳しく、常に自分を向上させることに努力している、といった姿に接する時、何も感じないでいることは誰もできません。また知識を伝えるという目的以前に、この先生は自分たち生徒を愛してくれているんだ、あるいはそうでなく学問を通してのつながりしかこの先生には求められない、というふうなことは敏感に相手に感じ取られるものではないかと思われま

生徒を思いやる心があつてこそ、生徒を厳しく指導することもできるのだと思つたのです。厳しさはまず自分自身に向かつてなされるべきでしょう。自身に厳しい者だけが、他にもし厳しくすることを許されるでもないのではないのでしょうか。ちよつと実際に苦しんだ経験のある者の言葉が何よりも、説得力を持つていゝものと同じように、指導はあくまで厳しくあるべきが本当だと私は思っています。しかしそれだけでは片手落ちで、今のべたような点に十分な配慮が必要であるうと思つたのです。そして個人の持っている能力、これを出せるだけ多方面にわたつて見つけ出し、その限界までのぼしてやる事が出来るればどんなにすばらしいことでしょうか。いつ、どこでも、持てる力を思いっきり生かすことができる、これも指導の仕方如何によるものと思つたのです。

以上、教師約二年の反省と、抱負をのべたつもりがとりとめのないおしゃべりになってしまいました。希望は大きく、理想は高くともいいいます。毎日毎日を私なりに悔いなく過ごしてまいりたいものと思ひます。

先日久し振りに能、野宮と那耶を鑑賞する機会を得その至難の演技に感動いたしてまいりました。
会のますますの御発展心より祈っております。

鶴甲の灯

E16 安藤幸雄
(三和銀行)

学窓を巣立って早くも半年余になるが、学生気質がまだ完全に抜けていないのが現状である。しかしながら、社会人となって感ずる、学生時代と最も異なる点は自由な時間が乏しいということであり、その点、好きな時間に好きなだけ謡曲が謡えた学生時代は今よりも夢また夢となりつつある。

学生時代の思い出は尽きないが、我々16回生のジュニア時代、つまり鶴甲の草創期のことを若干触れさせていただきます。

現在の教養部鶴甲学舎には、15回生のうち、いわゆる御影の人達が初めてその足跡を残し、我々16回生は入学と同時に全員が鶴甲に結集したのである。それ故に姫路分校の灯は15回生を最後に絶えることになった。我々の入学した頃の鶴甲は未だいたるところが工事

中で、講義中正午になるとサイレンが鳴り渡り、ダイナマイトの発破の音が響き、大教室が、ガタガタ震れたものである。その当時の鶴甲の食堂は現在の如く立派な大きなものではなく、バラックの寄せ集めで狭いものであった。そのため、昼食時の混乱は甚しく、昼休みは80分という余裕が与えられた。風韻会入部早々の我々はその時間を利用してかの魔の階段を登り、放課後以外にも毎昼、六甲台部室に通うことになった。もともとはそれは、我々のクラブ熱というよりも、六甲台の縁にあこがれたためだと言っても過言でなからう。というのは当時の鶴甲は赤土ばかりで、スリパチの底でうごめいているような感じがして、鶴甲を逃げだしたのであった。ともかく、80分もの長い昼休みをもてあましたのであった。とは言うものの六甲台部室に通うと、当時の四年生につかまって、足のしびれに耐え切れない時がしばしばあった。新入生が四年生じきじきに練習をみてもらうというのは、当時としては誠にありがたい事であつたらしいが、我々の足の痛さにはかえられなかった。

そんな時に15回生の平岩さんが教養部のサークル連合とかで部室を一つくれるというので少々教養部で動きまわつた。そして獲得したのが例の体育館裏の部室長屋の一角である。床はコンクリートで我が風韻会としては全く使いものにならない感じがあつたが、とにかく居住権だけ確保したのである。そのうち後期に入って食堂が完備され、昼休みが短縮された。おかげで昼休みに六甲台部室に行けなくなつたのである。そこで我々としても、鶴甲部室があるのだから、大いに利用しようではないかという事になり、体育の道具入れでしかなかつたロッカーに謡本を入れ、床には上敷(ゴザ)を敷い

雑感

P16 戸田美代子
(小学校教諭)

☆只今、教員一年生。

子どもたちの、目のつけどころとなり、又先生方の指導の対象である私達。

か、休まる気のしない鶴甲で我々だけの部室を持って昼休みそこを
使えるということは本当に嬉しいものだった。おまけに鬼の四年生
からも逃げられた訳である。初めのうちはこれでもよかつたが、そ
のうち、練習中は足が以前にも増して痛いし、晩秋には、冷え方も
激しいものとなった。そこで何とかしようとして思いついたのが、
洋弓部的に使った後のボコボコの畳であつた。確か畳五百円で
買ひ入れ、部室のコンクリートに敷きつめ、その上に上敷を敷くと、
何とか謡曲部らしい部室となつたのである。

かの鶴甲部室では、わからないままに、我々だけで猛練習をした
こともある。また練習を放り出し、六甲台の先輩を排斥してまで熱
のこもつたミーティングをやつたり、二人三人集まれば、恋愛論や、
芸術論をたたかしたりもした。まさに鶴甲部室は我々教養部部員
の真に心の安らぐ場所となつたのである。

その後いろいろと改良が加えられ、現在も鶴甲部室は風韻会には
なくてはならない存在となつていふと思う。ジュニア生が真にかの
部室の存在価値を認め、大いに活用してもらいたいものである。

(昭、四十三年十月三十一日)

大学時代の、閑かなる別世界のような所から、ふと身をおいた学
校は、我愛する誕生地の隣である。環境は同じなので、子どもたち
の気持は、わかりやすいところだが、団地ができかけ、教育
ママゴンの出現により、なかなか、のんびりなどしておれず、先輩
方の経験談をうけたまわりながら過ごした一学期間のあわただしさ。
のんびり屋の私が、かくも他の人と同様、てばやくできるよにな
っているのは、この習練の賜であらうか。こうも現実とは厳しいも
のかと、驚きながら、ガップリと、とり組んで、肩がこり、疲れか
ら風邪、扁桃腺がはれして、いつしか一学期が過ぎた。とにかく、
私の理想とする「善意の人間」となつてくれるようにと願いつつ、
子どもたちが二年生であるのは、この時だけ。その間の責任は私だ
と、重い責任を、しよいながら、けなげな(?)心で過ごした。こ
の緊張も、何かもっとも大切か、ようやくみきわめられるよにな
つてきたのか、丸みをおびて、空間ができ、暇を感じるよになつ
た。とすると、謡への愛着心が湧き上る。

☆喫茶店の片隅で。

お兄様のような、あなたと二人なら、あまえて、たのしく過ごしたい。

お姉様のような、あなたとなら、ちょっと御意見を伺いたく、御相談いたしましょう。

弟のような、あなたとなら、今思っていること、したいことを、励ましの気持をもって、聞きましょう。

妹のような、あなたとなら、経験のあることを、時にはお姉さんらしく、又友らしく、語りあいましょう。

そして、親友のあなたとなら、つつみ隠さず話し、聞き、これからの人生を、私たちに考え合ひましょう。

こんな思いで、利用することも、あまり、なくなつた今、喫茶店の片隅で、「あー、能を観たいナー」、この思いが滴たされず、体中一パイにひろがって爆発寸前の状態になりつつある私。懸念していたことではあるが、いつ・どこで・何があるか全然わからない。少し暇になると、たまらなくなり、声を出し、書をひらいてみることにしばしば。同じものを、何度も何度も……。そして古の世界へとひきこまれるのである。すばらしい幽玄の世界へ……。

☆両親。

生命の大切さ。といっても、私の両親が、病の床に伏しているというわけではなく、少し老眼鏡のお世話になりかけているという程度なのですが……。この十二月で、銀婚式を迎えます。たぶんこの年ぐらひであろうと、前々から予想をたて、弟たちとプランをたてていたのですが、つくづくとありがた味を感じるのは、私の年のせいでしょうか。「おかあさん、きれいな」「おとうさん、元気ネ」

といえるのは、子どもにとって、どれ程、すばらしく、しあわせなことか。いつまでもそのようであって欲しい。と同時に、謡で結ばれた、私達風韻会の皆様も、そのようであってほしい、そうなりたいたいのだと、つくづく思うこのごろです。(一九六八・十一・三)

“風韻”第9号発刊賛助

三和銀行

“風韻”第9号発刊賛助

竹中工務店

市大・一橋大の紹介と神戸大の現状

市大能研を語る

幹事長 矢島 勝

風韻会の皆様、益々御活躍御発展のことと御慶び申し上げます。また、本年は三大学謡曲交歓会を立派に催していただきまして有難うございました。

ここで市大能研の紹介をさせていただきます。市立大学謡曲部は「大阪市立大学能楽研究会」というのが正式名称であり、普通略して能研と呼ばれます。そして本年で設立以来四十六年になります。この能研の設立目的は「広く能楽を研究し併せてそれを大衆に広める」とされてます。しかしながら自己の理解に終始して、とても大衆に伝えるという所に達してません。

年間行事としては

一月 電装会 OBと現役との交流会

三月 春季合宿

五月 三大学交歓会

六月 春季学連大会

八月 夏季合宿

十一月演能大会

十二月秋季学連大会

この他に春秋のハイキングや大小様々のコンパ、隔年発行の雑誌「香語」や部誌「小面」の発行と行事や仕事は決して他校にひけを取るものではありません。

その中で最大の行事は何といっても「演能大会」であります。本年の大会に於ては「敦盛」と「吉野夫人」と二番の演能をいたしました。殊に「吉野夫人」は「六人揃」の小書(特殊演出)付で五人の女子学生が舞、地謡は学生ばかり又、笛も学生というものでした。このように学生が能を演ずる事はすばらしい事ではありますが、それにはまた様々の障害があります。

まず第一に一般に「能はアチブルの所産」という觀念が浸透しておりその觀念を学生である我々が打破する事は、非常に難しい事です。殊に、最初に取り組んだ「小袖曽我」には、当時の師匠の交替という悲劇を生みました。

次には経済的負担という問題の克服ですがこれは学生の身である

我々にとっては一番に感じる大きな問題です。結局出演者による個人的負担は避けられないのです。

次に時間的制約、これは直接の出演者ばかりでなく広告取や番組作成その他の雑務に追われる下級生にとっても大きな問題となります。個人の貴重な時間をどこまでもクラブに拘束する事が出来るのかといった問題は、クラブのあり方を決めるものですが、現実には個人の犠牲を必ず伴っているのです。

私達はこれらの問題を持ちながら、今迄能に取りこんだのですが、それはまず第一に「能は完成された物」でありやはり能をしてこそ能研の存在理由がある。また実際クラブ員が演能すれば、下級生も本心に能を身近に感じまた理解興味を広げる。さらにまた能は、シテ中心主義の芸術ではありますが、学生が能をした時には、シテ中心主義の克服も可能であると考えられる。私達は「共通の苦しみ共通の努力、共通の喜び」という言葉で、それを現わしますが、能は部員相互の連帯感の前提があつてこそ可能であり、またそれを深める手段としても必要と考えるのです。もとよりこれは直接の演能という問題というよりは、学生がクラブとして演能を考える事から生まれて来るのですが、シテ中心主義を克服する事こそ学生能としての所似と思うのです。

過去の「小袖曾我」「小督」「土蜘蛛」今年の「敦盛」「吉野野人」と演能大会も四回を数えましたが、毎年この「能のシテ中心主義」は大きなそして最大の障壁となりました。これからもそうなつて行く事でしょう。しかしながら「演能」という大前提の下で、それを如何に理想の「学生能」たらしめて行くかが私達の大きな課題なのであります。

○観能(自由参加)

鏡仙会 (毎月)
緑泉会 (年数回)

○その他………年輩との会、コンパ等。

以上が主な活動の紹介である。さきに部員が大変少数だと書いたが、さらにその大半が、他のクラブにも属しているという状態で、上記活動の執行者は、いつも部員集めという難行を強いられる。それでも、定期練習、合宿等への参加者は半数程で、今年については幽霊部員に対して、除名処分という強い態度までとつた。小さなクラブで、上記の如く多くの活動をやってゆくとすると、必然的に全部員の一致したチームワークのみが、その推進力となり、幽霊部員は邪魔になるだけだからである。しかし、それ程、きびしくするだけの意味が上記活動にあるのだろうか。ほぼ固定化している各行事を無理してまでガムシャラに踏襲するなんてナンセンスである。観世会は、もつとのんびりと謡曲や能を楽しむ者の同好会であるべきだという意見も、一方において有力なのである。特に一橋祭で演能する場合に、この両派は、激しく対立し、師範の「能をやれ」という強い意見の中で、毎年クラブの執行部はジレンマに悩むのである。(さもなければ、演能に向つてヤミクモに突走るのみである。)演能は、ここ2年中断されたが、来年は「小鍛冶」をやる事になった。シテ、ワキ、地謡と全部学生でやるのであるから、その大変さを身をもって体験する頃、再び今言ったような問題が表面化してくるだろう。尤も同好会派は、クラブに対して無責任派が圧倒的なのだから。次に、年間を通じての定期練習として、我々は週一度師範宅で練習しているが、集まる部員が数人(多くて10人位)である為、その指導は極めて懇切丁寧である。仕舞は文字通り手とり足とりで、一部始終先生に見てもらい、「鶴亀」も先生の前で謡込んで覚えろという次第で、多人数のクラブにはとてもマネ出来ないだろう。賢沢な方法をとっている。部室での練習(謡中心)は、前回習った事

一橋観世を語る

幹事長 阿左見 隆 雄

現在の部員構成は、4年1名、3年6名、2年4名、1年2名の計13名(全部男子)である。例年、年の瀬ともなると部員が数名になり、存続さえ危ぶまれるのに比し、今年は量的にはまずまずと言つたところである。とは言つても貴部(風韻会)等と較べては、余りに少人数であつて、この少人数さが、良きにつけ悪きにつけ我が観世会の性格、特徴なりの大きな原因になっているのではないかと思う。さて、一橋観世会を語るにあたって、まず主な活動状況、続いて幾つかの問題点を述べてみることにする。

○定期練習………師範宅で週1日 (4時間)
部室で1~2日 (3時間)

○強化練習………年3~4回。発表会の直前などに。
○合宿………春夏各5日間ぐらい、秋合宿は3日間ぐらい。

(一橋祭の為)

○学園祭参加……一橋祭 (11月)

小平祭 (6月)

○他校との交流……イ三商大 (5月)

ロ四大学 (夏冬2回)

ハ津田塾 (年数回)

(注)四大学とは東大、日女大、津田、一橋で今年発足した謡曲

等交歓会

○年刊部誌発行 (12月頃)

の復習みたいなものである。しかし、この方法も部員増の傾向にある今日、全体の実力レベルアップ、練習の効率等から言つて、大いに検討すべき時期にきているのである。

練習後に先生を囲んでの雑談等は、まさに少人数の観世会ならではの一時で、大変アット・ホーム、なごやかな雰囲気である。公私にわたつて我々の良き師であるのも、観世会の先輩であり、20代の若さの故でもあるうか。先生との親密さは、勿論大いに結構な話である。が、それが一橋観世会の主体性の欠如とウラハラのものである。は、断じてならぬ事今さら申すべくもありません。しかし、この問題大変に微妙であり、難しいものだと言つながら痛感しているのである。

まだまだ書くべき多くの問題を抱えながらも、拙文を連ねるうちに紙数が、尽きてしまった。もし、この拙文が、わが愛すべき一橋観世会の一端を認識するに役立ち、同時に貴サークルとの友好関係の促進に役立てば、幸甚の到りと思つております。 11月25日夜

風韻やら謡やらについて

P18 梶 川 孝 子

今年の大学祭のある日(学部シンポジウムのあつた日)例年の様に文総デー出演の為の練習が行われていた。私は法学部の新学舎のシンポジウム会場にいた。と、なつかしい風韻メロデーが聞えてきた。アカンなあとと思った。救い様がない、と思った。風韻にとつては、模擬店と文総デー出演の為の大学祭でしかないのか。又風韻の組織に埋没して、外の嵐をどこ吹く風と横目で見ているよ

だろるか。今教育学部では就職差別の問題が大きくとりあげられて
いる。左翼な思想傾向を持った人間を教師にしないという思想差別
の問題である。この問題は昨日、今日の問題ではなく、それ故何ら
かの漠然とした問題意識をいつの間にか、しかも偏見を伴い皆の心
の内に任んでいたと思われる。しかしこの秋以来の問題の表面化、
十月二十三日のストに至り、そうした差別を教育の反動化、ひいて
は国の政治対策の方向と一にして感じられる様になった。これは一
例であるが、この様に政治、社会、そして体制の問題の中に私達は
なげこまれていたのである。かかる社会的存在の自覚なくして、大
学サークルの一つとしての風韻会活動をしていてよいものか。外
嵐の避難所にサークルをしてはならない。謡という今となっては孤
高の芸術を追求するサークルの性格からして、社会的存在を云々す
るのは難しいだろう。謡の世界と現実社会は当然一線につらなっ
た時ではないから。しかしながら、謡い終って、個々の人間に戻っ
た時まで、謡の世界や謡を継承してきた世界の人間である必要はな
い。その時主体的な現代に生きる人間でありたい。謡をやっている
様な人間は意識の面はどうであれ実践的に革新的な力を持つことは
出来ないと思われよう。この言葉を体験的に自覚しつつ反省
してみたいと思う。幹事学年として自分を反省していることである
が、謡や仕舞の程度は先輩の技量をまねることも出来ないのに、会
の運営に関してはほとんど踏襲し、新しいアイデア・方針など実行
したためしがない。伝統、過去になされたことを守るのに一生懸命
で事柄に対しては過去に例があったことであるのかないのかを第一
に問題にする。こういう態度がしみついていては情けない次第で
ある。口では何とでも言えるが……理解と実践のジレンマここに
あり。

(「ザ・ふういん」からの転載)

腹臆なく話さねばならない。サークルは、我々の、この『られる』
社会(全てが受動表現でなされ、より大なる物に、善悪を含む全て
が帰着されんとしている)における唯一の又最後の個人の主体性
を守る砦であるのだ。

さて小サークル(部員数40名以下)においては、上記の事は、個
人対個人の関係が重要であるところから、かなり容易である。しか
しその反面、個人感情が強くなり、運営管理面におけるルーズさを
免れない。それを防ぐためには、リーダー及び上級学年の者は、個
人的な立派さ(より自分に厳しくなければならぬ)を備えて、下
位の者の敬意の念からの行為を生みださせねばならない。かくのご
とく小社会においてリーダーの権威を高める事は、運営面能力以上
のことが要求されるので至難である。それにしても風韻会はずばら
しい。(「ザ・ふういん」から転載)

サークル論

B20 河野 豊

サークルの意義として、自己疎外の解消と自己確立の場の提供が
あげられるが、ここでは自己確立の諸問題について考えてみる。と
いうのは、私は自己疎外の解消は自己確立によって始めて現実性を
もつと考えているからである。即ち自己疎外の解消は自己確立に包
含されるのである。

さて自己確立とは、広くは人間の真理を求める精神上的の意向の認
識をいうのであろう。そしてこれが一個人内で処理される場合(例
えば隠遁者の如き)は何ら問題を一般社会に起こさぬであらう。し
かし社会の一員として真理を追求する場合には、各構成員の自己認
識の程度差から、具体的行動において問題がおこってくる。それは、
芸術系クラブにおいては、練習において明確にされる。①目的意識
をもった者は、無駄な遊行には批判的であり、練習(技術及びその
精神の修得を目指す)、ミーティング(相互の人間の成長)に重要性
をおき、大学生活を最後の根本的研究可能な期間として気迫もこも
るうが、他人に対しては、どうしても厳格になりがちである。②それ
に対して無目的に入った者は、遊行単なる気休めに終始して、積極
的には練習に参加せぬであらう。しかし私は、③を否定するものでは
ない。④のみでは、クラブは単なる学究の場となり、激しい論争
がなされ、心の休め所がなくなってしまう。また⑤のみでは、クラ
ブも単なる無能なる者の場なたばつこの場となり、何ら得るものが
ないであらう。⑥⑦両極端に走らぬためには、我々構成員が自由に

建設に生きる



大林組

誌上研究室

「誌上研究室」いかにもアカデミックな見出し。その名に応わしく、それぞれ分野で大いに活躍された二人。今宿さんは日頃の研究成果をこの時とばかり発揮され、又西村さんは、不真面目な学連委員とはおっしゃりながらも、いざ出席なされば、一人で委員会を振り回す程の威力のある方。その文面に表われた彼女の心意気大いに感じとっていただきたいものです。

民衆文化と能の成立

P18 今 宿 純 男

○はじめに

能は伝統芸能という範疇の中に位置付けられ、それは諸般の芸能に比して最も芸術的価値の高いものであると言われている。

さて、その能は、現代の高度に発達した機械文明社会に於て、一体いかなる意義を、あるいは役割を持っているのだろうか。

能の創作活動は室町時代で一応終止符が打たれており、それ以降は旧作の繰り返しのみ演能がなされて来ている。すなわち、それは家元制度の確立と権力者階級の保護、監督の故に、新しい創造活

解し、ひいては我々の進むべき未来への道標を確立することである。

我々は、芸術作品(能)それ自体を究極の目的とするような芸術至上主義的な態度をとるのではなく、その社会的存在の本質的意義の解明に努力すべきである。

一、民衆文化とは

歴史の創造主体が民衆である、ということは誰しも異存のない普遍的命題であろう。すなわち、社会の底辺に存在する民衆のエネルギーが社会を発展成長せしめるのである。そして、しかも民衆は状況的存在である限りにおいて、彼らの存在する時点に於ける自然社会からの影響を免れない。従って、社会の最底辺に存在する民衆も完全に自律的でありえないからこそ、彼らが創造する文化は、必然的に社会的歴史的制約を受けるのである。では具体的に民衆の創造する文化(民衆文化)とは、歴史的に一体いかなる形態をとって創造されるのであろうか。

民衆文化を考察する場合、基本的には人間の生産労働を無視するわけにはゆかない。民衆は常に権力者(支配者)によって、肉体的に、精神的に、或は物質的に搾取され続けて来ている。それに対して、過去、民衆が主体的に、積極的に階級抗争を推進して来たとは一概に断言できないが、何らかの反抗があったことは認められる。一方、文化活動の面に於ては、自分達の生産労働の慰労と五穀豊稔の祈願の為に鎮守祭や盆踊りを行っていた。つまり、そういう祭事によって、明日への生産労働の精神的糧を獲得していたのである。そして、そのような文化運動が、民衆文化を萌芽させ昂揚させていったのであろう、と考えられる。

更に、民衆文化を考察する場合、散所と河原に棲息していた部落民が民衆文化の創造主体であったということを忘れてはならない。部落問題はともすると、江戸時代のエタ・非人階級にのみ焦点が置か

動は完全に停滞してしまつたのである。もちろん過去四百年間、能の「前衛」たらんとする者は少なからず存在したに違いない。しかし彼らは、奇異の念を持って迎えられ、異端者として斥けられていったことだろう。そして現代、我々は能を、芸術的価値を持つ伝統芸能として、その存在意義を一応認めている。

だが、現代に於て、我々の現実生活から遊離し、創造主体を喪失してしまつている能は、もはや大衆自身の中に溶け込んで来る可能性は皆無であろう。なぜなら、文化というものは、ある歴史的発展段階に於ける下部構造の諸矛盾を反映する社会的状況と、歴史の創造主体たる民衆とを、その基盤として、或は担い手として成立するものであると思うからである。従って、現代に於てすでにその基盤を失なつてしまつている能は、必然的に大衆から遊離し、孤立するのである。(これは全ての伝統芸能の宿命かも知れない)

我々の任務は、能(更に、その他の諸々の伝統芸能)の成立した社会的歴史的背景を見極めることにより、我々の存在する現在を理

れているようだが、それは河原・散所という賤民階級の歴史的形骸の遺制であるということ忘れてはならない。

さて、ここで一応民衆文化の概念規定を終え、次に、果して能が民衆文化の所産であるかどうかを、その歴史的社会的背景から考察して行こう。

二、能の社会的歴史的考察

(一) 能の形成過程

能の発生経路として、奈良時代における散楽(伎楽・舞楽と同時大陸から流入した東洋的舞楽)、その音転と言われる平安時代の猿楽が挙げられる。猿楽はこの時代、かなりの隆盛を極め、都に於て専業の賤民猿楽者により滑稽物真似劇的な演出にまで発展し、これに今様歌・白拍子舞などの流行的舞楽、また当時の寺院に從属した咒師の寓意的歌舞が摂取されて、歌舞的色彩を濃くし、田楽(広義の猿楽に属す)の歌舞の影響によって、この猿楽の歌劇化が促進された。以上が能成立過程の一般的定説である。

次に猿楽について考察すると、それは散楽の曲目の一つに猿の曲芸があり、そこから由来するという説と前述のように散楽の音転だとする説がある。しかしいづれにしても、散楽と猿楽は深い関係をもっていたと言えるだろう。猿楽に関する記録は十一世紀の藤原明衡著「新猿楽記」「雲州消息」が最初であるといわれている。それによると、滑稽劇、諷刺劇から猿猴なものや楽劇、楽舞、曲芸に至るまで上演され、しかも劇場の形態も添えていた様である。又、地域の芸団も組織されていたということが俳優の名前から推察される。ともかく、この様な新しい猿楽の出現は、東洋的舞楽から飛躍的に劇的演出に近づいて行くものであった。又、古代国家の崩壊により解放された賤民は、広汎に都会における雑伎の中に流入してきたことも知ることができる。

さて律令体制が荘園制の成立という内部的矛盾により崩壊の道を歩むという社会的状況の上に成立した貴族文化は、民衆との現実的つながりを断つた極めて極限された階級的視野と、生産性を欠いた消費的性格の強いものであった。それに対して、解放された民衆は結局、再び荘園領主に隷属し収奪されていくのである。が、彼等のうちの賤民的系譜を引く民衆は、一般的に「散所」という形態をとっていた。そしてこういう所から新しい様々な民衆文化が萌芽するのである。

次に田楽について述べておこう。田楽は五穀豊穡を祈願する宗教的な祭事に由来し、種時や耕作に関する素朴な擬態が舞踊化したもので、農民の慰安にもなっていたものである。これは、平安時代には新しい広義の猿楽に含まれて、京都及びその近郊の流行となり、当時の貴族生活にも深く浸り込んでいた。そして、田楽は芸団組織をもとる様になり、散所民によって運営されていたのである。民衆文化は、それが例え低俗なものであったとしても働く民衆が創造し享受するという点に於いて意義がある。そしてそういう下からの文化運動が、徐々に形骸化した貴族文化を葬り去った。そして歴史を進展させてゆく原動力になってゆくのではなからうか。同時にその事は政治権力の盛衰についても言えるだろう。すなわち、社会の底辺に存在するエネルギーが蓄積され遂にはそれが社会の革命的要革を成し遂げてくるのである。

さて中世に入ると、猿楽や田楽はそれらの芸団組織を基礎として「結座性」を持つようになってくる。座は座衆相互の横の関係を保持する組織であると同時に、本所領主と座衆の縦の組織でもあった。座の成立は農村に於ける神社の祭事組織と深い関係を持ち、そこから神事組合としての「宮座」が形成されたのである。そして芸能座は、地方村落のなす一つの所役として、鎮守社の宮座の芸能を担当し、やがて中央社寺と経済的に結びついて独自のな座に発展したのであ

対話的要素を主とした劇として成立したのである。結局、能は、農業生産力の上昇と商品貨幣経済の浸透によって崩壊してゆく荘園体制において産声を上げた、民衆の歴史的成長による下剋上に伴う文化斗争の産物であったと言えるだろう。

要するに、支配権力の弱体化は、いかに澁刺とした優れた民衆の文化が創造されるかということを示唆しているだろう。能、狂言、連歌、茶の湯などはそのことを如実に物語っている。

(一) 能の成立

さて、このようにして成立した能は、地帯的な名主達が社会を導き、文化を担う階級として成長してきた関係で（観阿弥・世阿弥の出現によって独立した楽劇の体裁を整え）室町幕府の式楽にまで高められた。しかも能は上層階級に特に好まれる様になったのである。そのことは、世阿弥のいわゆる能の本質たる「幽玄」「花」という理念の中に、王朝的な夢幻仙境（理想世界）へ観客を誘導しようとする古典的香気があり、それがこの時期に没落過程にあった貴族や公家と結びあって幕府の規正を保った上層武士階級の憧憬の的となっていたのである。つまり能は単に武士階級の文化的所産であるだけでなく、上層の貴族的なその所産である要素がより濃厚となっていた。これに対して狂言は、能とは全く対照的に下層武士階級や下人層によって育成され、広く民衆の間に共感を湧き起していった。こうした能と狂言の差違は、前者が理想を追求することによって現実を逃避する形態のものであると同様に、後者は現実をえぐり出すことによって却って現実を否定するものであったという点における本質的な共通性格によって解消される。即ち極論すれば、能も狂言も現実懐疑の芸能だったということになる。ただ外面的には両者は対照的な芸能であり、それぞれの階級的基盤も対照的であった。さて、猿楽座は室町時代いかなる経済的基盤によってその興行を成り

る。つまり地方村落に発生し、成長発展した猿楽座が外山（宝生）、結崎（観世）、坂戸（金剛）、田満井（金春）の四座や、近江の山階、下坂、比叡の三座などであった。そして社会的興味の變化に伴い、田楽は衰退の一途をたどった。

又、奈良朝以来、社寺には神事法典の為に「楽」を専属させ「楽頭」という主任者をおいていたのであるが、中世に入って「楽」も田楽・猿楽を主とするに至ると、どの社寺にもこの楽頭の地位を権利化して、地方の村落に発生した芸団に附与することになった。即ちその芸団の座頭に對してこの楽頭を補佐する証状を与えるのである。そこで補佐をうけた芸能座の座頭は、その社寺の楽頭として田楽或は猿楽の演芸権を掌握し、必ずその社寺の勢力圏内に於ける興行の独占権を認められるのである。この楽頭の権力が「楽頭職」である。こうして中世の畿内村落に発生した芸能座は、京都・奈良の諸社寺からこの楽頭職を獲得することによってはその活動を開始し開始したのである。そして社寺の保護を獲得した芸能座は完全にその大社名刺を本所と称してこれに専属することになる。典型的な例は、興福寺を本所とし春日神社に參勤した四座の猿楽である。

さて鎌倉時代の猿楽は、鎮守社の神事猿楽が主体であったのであるが、当時の「神仏習合」の風潮により、仏教寺院に從属した咒師の寓意的歌舞を多分に取り入れられた。又、古代末期の令様歌や白拍子の舞の如き流行的歌舞も、多分に流入し、田楽の歌舞の影響もあつて、著しく歌舞的要素を加えることとなった。（前述「能の形成過程」）ところが南北朝の内乱期に突入すると、畿内農村には一變動が訪れ、下剋上の風潮に乗じて農村の地持の名主が一躍大名に成り上つたり、下人でもその富貴を夢みる世の中になった。こうなるや村の鎮守の猿楽もその変質期を迎え、自然に京都へと成り上つたのである。そして猿楽から、能と狂言が分化し、能は猿楽の中の象徴的な歌舞的要素を中心とした劇として誕生し、狂言は猿楽のなかの現実的な

立たせていたのであるか。猿楽能が幕府の保護下に入ってゆくと、当然社寺との結合関係は疎遠になって、彼等は在京生活を合理化するために、「勧進」という室町時代に於ける特殊な興行形態をとるようになってきた。勧進の目的は、元來諸社寺あるいはその現状の維持、或は災禍の復興のための費を求めると、多人数の協力を勧請するにあつてそのための勧進聖が個人として献身的な活動を示していた。ところが勧進の手段として諸種の芸能が利用され、特に田楽や猿楽の勧進興行が行なわれるようになった。つまり勧進聖が猿楽座に上演を定額にて請負わせ、一方来観者から人別の米銭を徴して利潤を計る仕組である。室町時代に入ると主な演能興行は全て勧進の形式で行なわれる様になり、「河原」に広大な常設棧敷を生ずるまでになった。棧敷の観客は公式の貴族に限られても、芝居（演劇とか演技とかいう意味でなく、「芝のある場所」つまり芝生である）には多数の民衆が集まったという。又、そういう事情から能と狂言の併演形式が確立していった。ここで一応「河原」についてのおいておく、前述のように、古代賤民には散所という荘園領主に對する隷屬形態をとる者と、隷屬せずにあるいは没落しあるいは自立する賤民が存在した。彼等は散所と同様に不課の地を求めて河原に住みついたのである。又、京都には河原だけでなく巷所（右京一帯の河原者の居住地）もあり、そこには賤民的系譜をひく者だけではなく、当時に於ける中央・地方の社会的没落も流入するようになった。そしてこの様な賤民部落から、実に多くの雑芸者・芸術家が輩出したのであり、農民闘争たる土一揆に於いても賤民階級がその主体であったことも見のがしてはならない。

(二) 能の確立

能の大成者は観阿弥・世阿弥であるといわれている。しかし注意しなければならぬことは、観阿弥と世阿弥との時代的背景が体制

的な過渡期であった、という事である。それ故に能の歴史における彼等の役割も相違が認められてしかるべきであろう。観阿弥と世阿弥の相違は前者が立合や衆人の愛敬を力説するのに対し、後者は貴人の意や貴族の観賞眼を顧慮している点である。又、それは農民的な素朴さからくる写真主義と貴族の幽玄との差異にも求められる。更に加えれば、観阿弥の能がツレやワキや狂言方の多く出る能に對して、世阿弥の能はシテ一人主義（風韻第八号、内海さんのレポート参照）的能であった。能の大成者たる観阿弥と世阿弥との能に於ける根本的差異は、結局兩者の社会的歴史的存在の問題に帰するであろう。つまり衆人性を持ち南北朝の混乱期に存在した観阿弥に對して、貴族性を持ち「花の御所」時代に存在した世阿弥、このことはやはり文化が歴史的社会的産物であることを示しているであろう。かくして世阿弥の能は幕府（或は上層支配者階級）に迎合してゆくわけであるが、それに対する反動として、つまり世阿弥的能の漸次的否定として、能それ自体の本質的変容たるワキ重視主義的能や単式能が小次郎・弥次郎の出現によって成長して来る。又、民衆の側からも手猿楽（素人猿楽）、女猿楽、女狂言などが隆盛を極め、真の民衆芸能を育成してゆく澆利としたエネルギーが感じられる。これ以降は民衆芸能（或は乱世的芸能）としての意義を保ちながら権力者階級の保護によって城郭建築に象徴される潤澤豪放な桃山文化に吸収され、次第に衆人性を否定しつつ貴族化されてゆく。そして江戸時代に入ると能は幕府の式楽となり固定化され、更に多元制度の確立によって全く創造性を失い、民衆芸能としての地位は完全に歌舞伎・浄瑠璃などの新興町人文化に奪われてしまった。

○おわりに

現代に於いて、農村共同体的芸能（厳密に言えば祭事）がその後継者を失い、次第に消滅して行く現象は、人間社会の歴史的發展の必然性であるかも知れない。しかしそれが農民の生産労働から創

「ガクレン」のこと

L18 西村 登志子

私が「不真面目な学連委員である」と、風韻のみなさんは、寛大なのか、あまりおっしゃらなかつたけれど、あれこれ自己批判するに、我ながら、真面目、熱心とはいえない様だ。しかしながら、毎度毎度たいくつな委員会に呼び出されて、何も感ぜず、考えず——と言わなくてもいい。夏の合宿のミーティングで、皆様に話し合ってもらった様に、現在の関西学生能楽連盟は、実に複雑な問題を、多くかかえているのです。昨年の夏に、金春流の加盟が承認されて、学連は全く新しい要素をもった事になり、それに応じた学連の新しい方向なり、態度が必要となった事は、言うまでもない事。そして同時に、加盟校の数も16校と、大所帯となり、発表会の時間の問題等、とにかく、元来の、既にマンネリ化した方法、考え、目的をもって各行事に対する事ができなくなつたのが現状です。何か新しさが欲しい——と思いつつ、見つける事のできなかった一年、この学連の問題が、各個人にゆきわたつたかどうか、わからないことだけれども、誰もが真面目に考えるべき事でしょう。関西学連自体の建直しと同時に、関東、京都の学連との交流の問題もあって、全て未解決のまま、今年の学連もスタートするのです。そうした問題を、各大学がどのように扱い、各個人が、どれだけ気にしているのか、その度合によって学連は、グラグラ揺れもするわけです。できるならば、この16校の集りを、できるだけ利用したいものです。何をその路線とし、どこにその目的を置くのか、各大

造された文化的所産である限りにおいて、現代の如く民衆が何ら主体的文化創造活動をなすことなく単に「民衆不在の文化」を甘受しているという事は、何と次元の低い現代文化であろう。我々が未来に向つての文化的創造活動という主体的積極的な運動を志向するならば、民衆のエネルギーと農民「探の性格を兼ね具えた初期の猿楽やその他諸々の中世芸能にその原点を見い出さねばならないだろう。又我々は、文化的創造活動の為の伝統芸能の継承擁護という中心課題を忘れてはならない。なぜならそれを忘却してしまつては、単に教養主義的に、或は道楽的に「形」（もの）として、伝統芸能を享受しているだけにすぎなくなる。つまり、私はそんな観点から能の現代における意義を与えてみたかった。ただ日本民族の創造した偉大な伝統文化を単に無批判に享受し、「ああ、やっぱり日本人は優秀な民族やなあ」と悟つたとすれば我々をほめて勲章でもくれる方々がおられることだろう。

XXXXXX

XXXXXX

「民衆文化と能の成立」というテーマは、丁度初夏の陽光で汗をかき赤塚山から降りてくる途中、付属の校門前でピカッと私の脳裏に閃いた思い出深いものです。特にこのレポートの中では、社会的存在としての「能」を強調したかったのですが余り成功しませんでした。長文にもなつたのは、いかに自分の頭が悪いか」というパロメーターでもあります。

参考文献 林屋辰三郎氏の「中世文化の基調」及びその普及版「歌舞伎以前」が面白かつた。

（「ザ・ふういん」からの転載）

学の態度を、もつとはつきりとさせる必要があります。発表会だけで良いというのなら、それでもいいだろうし、学生の手でもつと他の事をと考えるのもいいと思う。ただ、何の考えもなく、ずつとこうだからというだけで、各行事に対することは避けるべきでしょう。無意味と思うなら、つぶしてもいいと思う。要するに、はつきりした態度を忘れないでもらいたいです。

無関心であるのは、気楽なものです。しかし、少なくとも学連に参加し、その一員に名を連ねるのなら、中途半端な態度は、とるものではないでしょう。少なくとも、ここに学連という一つの我々の組織が現在あり、問題をかかえてどうしようかと思つている事を、覚えていて欲しいと思うわけです。

とにかく、学連も、難しいところにいる現在、不真面目な学連委員であった事をひそかに反省すると同時に、みなさんの今後の態度（？）に期待させて下さい。



六甲プラザ

江戸前 橘寿司

神戸市灘区宮山町
六甲阪急ビル
電 87・2971
タチバナ ニクナイ

思い出の記

走馬燈

E17 向 浜 幸 雄

～ 四年生諸氏に風韻会での四年間の生活
をふり返って頂きました ～

光陰矢の如しとは言いが、早いもので我々四年生はいまや卒業を控え四年間の学生生活をおえようとしている。ここに我々四年生の学生生活において大きな位置を占めてきた風韻会に関してその四年間の足跡をふりかえってみよう。

数年後、十数年後この欄を読むことによって我々はクラブ生活を思い出しい懐かしい気持ちにひたるであろう。しかしながら我々がここに「思い出の記」という欄をもうけたのはそのような単なる懐古趣味ではなく、過去四年間の生活をふりかえることによってよりよき明日の生活を築く原動力とするためである。

風韻会での春秋が四度過ぎて、我々十七回生十一人はまもなくこのサークルから追出される。思えば、桜花爛漫の六甲台の芝生で初練習をやったからはや四年、今さらながら時の流れの速いのに驚いている次第である。

新入生歓迎ハイキングからコンクールに至るまでの各行事、或いは日々の練習、ミーティングや喫茶店でのダベリング等々の思い出が正に走馬燈の如く脳裡を駆け廻ってゆく。

しかしサークルというものはそうした楽しい思い出作りの場だけではない。サークル活動を通じて各個人の人的成長がなければならぬと思う。その点、我々十七回生は誰をとっても少なからず成長したといえよう。一年の頃には上級生から「まともがな」とか、「頼りない」とよく叱られたものであるが、その忠告のお陰もあって、三年の頃にはいわゆるまともな学年となった。しかしそのまともは作爲的なものであまり面白くはなかった。風韻生活四年間を通じて最も楽しく、有意義であったのは矢張り最後の一年間であった。それは個人の成長を基盤とし、自由な発言の下に本當の意味でまとまったからだと思う。

我々の学年はいわば戦後の日本経済のような学年であった。入学当時は生産力を完全に破壊された終戦直後の時期に例えられる。その後アメリカからの援助と自助の努力によって、日本経済は高度成長の波に乗った。現時点では日本経済とアメリカ経済とを比較した

場合、絶対額において日本が劣っていることは言うまでもない。だが、日本が現在の成長率を継続することが出来れば、いつの日にかアメリカに追いつくことが出来るだろう。我々が一日も早く先輩諸氏に追いつくことが、長年我々を御指導下さった諸先輩への唯一の御恩返しであると思う。この意味で我々は今後一層の努力を惜しんではならないと思う。

最後に、拙い我々を温かく御指導下さり、語と人生におけるむずかしさと面白さをお教え下さった宇治先生、藤井先生並びに先輩諸氏に心から感謝致しますとともに、風韻会の今後の発展をお祈り申し上げます。

三大学合同謡会

E17 湯 朝 憲 之

私がこのサークルに入部したのは、一年生の確か七月上旬、日差しもきつくなって、夏休みをまぢかにひかえたころだったと思います。したがって、毎年五月の連休を利用して行なわれる「三大学」には一年生としては参加出来ませんでした。

二年生の時は、市大の主催で行なわれました。そのころは「三大学」というものが私にはまだはっきりと理解出来ておらず、皆んなの後からチヨロチヨロと市大へついていったような感じがします。私としてははじめての他校訪問であったためか、市大を目のあたりに見た時は、神大とはあまりにちがうその学舎の並び方に呆然としてしまったことを覚えております。このような平地にある学校

だと、登校・下校が非常にらくだろうと思って、その事を市大の方に話してみると、市大の人にとってはその事自体が気に入らないとのことでした。要なところで海の見える神大の良さを一つ発見しました。

三年生の時は東京でありました。この時は、いわゆる「三大学」のマンネリ危機が叫ばれ、大いに激論がかかわられました。この討論によって親世流においては「三大学」継続の大前提が確認されましたが、それにもかかわらず、一橋大宝生と神大宝生が脱退してしまいました。この原因を考えてみますと、ひとえに、その部員数が少ないことではないかと思われま

宝生なきあと、かろうじてその命脈を保った「三大学」は、昨年この神戸の地でとり行なわれました。それは前回までのものとはかなりその雰囲気はちがっておりました。いわば旧来の形から脱皮したとも言えましようか。新しい試みとしての六甲山ハイキングも少々曇ってはいたが寒い感じがしましたが、非常にたのしかったです。雨もりのする集会所で他の大学の方々とふとんをならべて寝たのも今となっては良い思い出です。この会を通して「三大学」の前向の姿勢が確立されたのではないかと思えます。しかしながら、この会の根本となるものは、やはり謡曲仕舞の発表であり、それに付属するリクレーション、ミーティング等はいくまでもその付属物であります。この観点から、会に向けて、もっともっと謡曲・仕舞の練習が必要なのではないかと思われま

現在、大学は大きくゆれております。やがて何らかの形で大学は新しく生れかわると思われまますが、そのような中で、昔からの伝統的な「三大学」の意義を考えてみますと、もはやそれは失なわれつつあるように思えます。しかしそうだと行って今ここで「三大学」をやめてしまおうというのもしさびしいかぎりです。あくまでも継続の方向にむかって努力すべきだと思います。風韻会には行事が多すぎ

るとよく言われますが、これに負け、安易な方向に走ってはいけません。今後の御発展をお祈り致します。

最後になりましたが、長年御指導、御鞭撻下さいました宇治先生、藤井先生に心より御礼申し上げます。

大学祭

P17 沼田真弓

六甲台の門をくぐり、まず目につく階段。初めてその下に立った時、私はその被いかぶさるような石段に何とも云い難い威圧を感じたのです。それと共に、石段の向うにあるもの、未知なるもの、思いを馳せ、何故か武者震いに似たものにとりつかれました。全てが物珍しく、期待に溢れた夢見心地とまださめやらぬ五月、私達新入生は、早速大学祭の準備に追い回されました。入学して一ヶ月と少し。同じ倶楽部に属しているとは云いながら、まだまだ声をかけるのにも躊躇する頃です。ところが園遊会の準備に入り、あれをしなさい、これも、と次々と仕事が増えてくると、そんな事は考えておられません。今まで新入生の間で何となく張り合っていたガラス板が音もなく壊れ去り、グンと心が近づいた事、今更私が申す迄もなくすでに皆様経験済みの事と思います。皆で力を合わせて一つの事を仕上げていく、そこにある心と心の交流、これからの一つ一つの行事を通して一体どれ程それが深まってゆくのか考えただけでも楽しくなってくるではありませんか。でも勿論四年間という長い間で、すもの心の坐折もありお互いの意見の衝突もありました。それに度

重なる行事に本当に嫌気がさした事もあります。その時の気持ちを知り合える友達、それは何と云っても同じクラブで同じ苦労をしてきた友達ではないでしょうか。四年になった今、他の友達には感じられない何かが生みじみと感じられます。そりゃ例外もあります。でも例外の事は考えますまい。これから、2年目、3年目の大学生活を迎えられる皆様、きつと苦しい事、嫌な事もあるでしょうが、それを乗り越えてこそクラブの意義も見出されると思います。私自身、今、四年間クラブにいた事、そして友達を得た事、とても嬉しく、何よりもかけがえのないものと思っています。

狸々

J17 清見嘉朝

神戸は美しい町である。住めば都というが、まさに神戸のための言葉のように思える。須磨、舞子の海とその背景をなす六甲連山。神戸は四季おりおりの趣きを私に与えてくれました。

エキゾチックな町のように見えて実は日本の神戸。能を愛する心の素地を作ってくれる風土を持つ神戸。そんな神戸を一望のもとに見渡せる六甲台、私は、青春の四年を送ることが出来たのを何よりも幸だと思っている。神戸の夜景は百万ドルと言うが、私はこの夜景で何兆ドルという金を手にすることが出来たことか。そんな六甲台で年に一度、園遊会という、実にばかげた、それでいて楽しいフェスティバルが行われる。神戸のネオンを眼下に見る天上の夜店と言うべきか。しかしそこにくりひろげられる人間ドラマ。永遠に求

め合う男女の群がり、ダンスパーティー。あきることなき食欲の男女。酔いつぶれ、眠り込む男。この一夜に人間の性欲、食欲、睡眠欲の三欲が昇化される。かくのごとき人間どもに対し、もう一つの種類の人間がこの園遊会に集まる。それはこの園遊会を手段と考えてひとかせぎしようとする我々なのである。我々は天より送られた清酒と人間世界よりのブタ肉でもってこの日に興をそえるのである。しかしこの二種類の人間も夜が更けてゆくにつれて区別がつかなくなる。かく言う風韻商人の私も、見知らぬグループと輪になつて、歌をうたったり、他の店を散歩して回るようになるのであるが、そこはそれ、風韻商人の私のこと、植田氏の教えをうけて、コラのピンを集めて、狸々の利益向上につくしたことでした。

そんな大学祭も四回を送りましたが、毎年同じようでもあり、何となく違った感じでもあり、今思えば、それなりに楽しんだようです。

とにかく神戸大学の環境はすばらしく、実に景色のよい所で四年を送れたことを幸せと思うとともに、この幸せを三年以下の人も真に味わってほしいと思う。

ジュニア合宿

E17 辻 皓 一

合宿が日常のクラブ生活では得がたいものを我々に与えてくれることは周知の通りであるが、我々四年生は現在までにすでに七回、そしてこの三月に徳島県日和佐で行なわれる予定の春季合宿を加える

と都合八回の春・夏合宿を経験するわけである。いやもつと正確に言えば八・五回くらいかもしれない。すなわちジュニア合宿を一回二年生の時に経験したわけである。

我々十七回生が二年生の時に摩耶山の王蔵院とかいう所で行なったのが最初であったように記憶しているが、以後毎年ジュニア祭以前に行なわれているようである。これは技術の向上と部員の親睦を目的としている春と夏の合宿とは違い、一・二年生だけで行なわれ又期間も二泊三日と短かいこともあって、もっぱら一・二年生の親睦という点に重点がおかれているようである。しかしながら男子も仕事を習い又スタンプまがいの事もやるので夏季合宿における練習その他の面について大いに効果があることは確かである。反面、夏季合宿における一年男子の熊野大会などの楽しみもなくなったが。

我々の時は金曜日の放課後から日曜日の昼頃にかけて合宿したのであるが、これもずっと昔のこととて、どんな練習のやり方をしたのか記憶はまったくない。しかしながらつまらないことなら二、三覚えていた。例えば、出発の時教養部の渡り廊下の前に集まったことや、たぶん②系統のバスにのって行き、ケーブルの乗り場までの急な坂を歩いたことや、寺院を見学してそこで写真を撮ったことなど。そうそう写真機のシャッターを押してもらうのを二人の女性に頼んだのはこの僕であった。エッと……それから仕舞の練習中に王蔵院の前を通るハイカーがもの珍らしそうにのぞいて行くので、誰かがついたて、かなんかで見えないようにしたっけ。あれは確か女性だったなア。それから土曜日に差し入れがあったはずだ。安藤さんと上野さんだったように思う。

まったく忘れていたことを書いて行くうちに、少しは思い出したが、なかなか予定の枚数には達しない。しかしこれ以上書くことはやっとな卒論を書いてしまった後なのでいささかつらい。こちらで勘弁してもらおう。

四大学交歓謡会

T17 中 川 慎 吾

神戸大学へ入学し、倶楽部紹介があった時、私は「風韻会」へ入部しようとした。しかし、今思い出そうとしても、その理由が何であったかは思い出せないけれど、何かの理由で、半月程遅れて、ほとんど五月近くになって入部したのを覚えています。

入部してから一週間が経つか経たないうちに、「三大学合同謡会」とやらがあって、その後、初めての「四大学交歓謡会」を経験したわけです。何しろ、その頃は、先輩に対して、一種の畏怖の念がありましたので、「〇月〇日に、〇〇会があるぞ」と言われると、私達は出席するものと思いついて、文句は言わなかったように思います。けれども、幾ら謡曲が好きで入部したとはいえ、同じような（その時はそう思った）謡や仕舞ばかりでは、流石に退屈したものです。それでも辛抱して、会の後に何かを期待して、ジッと座っていたものでした。

「三大学」に比べると、その時の「四大学」は、比較的時間が短かく、四つのグループに分れて談話した後、リクレーションとやらの付録がついていて、文学部北側の芝生で、学校対抗のソフトボールをしたのを今でもよく覚えています。

二年生の「四大学」は、大変印象深いものがあります。それは、仕舞「高砂」の初舞台だったからでしょうが、その時のことは、今でも途切れなく、次々と憶い出が浮んできます。舞台上へ上る前の興奮。その割には、舞台へ立った時の落ち着きに対する自分自身での

は、「四大学」というものに、今以上のものを期待するのは無理だと思われまふ。そして、私の持つ不満というの、何か根のないもの、ただ自分の性格故に、新しいものとか、刺激を求めたいのではないかと自己分析などを試みる時、それ等の問題点や疑問点を、一つ一つ解いていくことの難かしさと、思わしさのため、悲観的（楽観的とも言える）且つ消極的な気持になっていることは否めません。

とにかく、「四大学」に対する不満はありました。が、現在では、それ以上に、行事の多いことにもっと不満を持つべきではなかったかと悔んでいます。現在の「風韻会」の年間行事は、飽和状態に達していて、息切れしそうな感じを受けます。そしてそれが、全ての不満に繋がると思っています。

もし、後輩諸君が、それを実感するならば、勇断を以って事に当るべきだと私は思います。若いということの証拠のためにも。

合 宿

P17 吉 留 敦 子

昨夏の合宿には行かなかつた。教員採用の面接試験と重なったからだ。学習指導要領なんぞをあてもなく繰り返しながら、「みんな今頃どうしてるかなあ」なんて考えていた。毎年漸く涼風の立つ頃、夏の合宿が始まっていたから、そんな時に自家に居るのが不思議な気がした。それ程、私にとって合宿は年中行事として溶け込んでいた。ところで風韻会の合宿を考えてみると、こんな無為な時の過ごし方もないものだと思う。部員の頭脳が尽く空になったかと思う位である。一週間経て帰りの車中で漸く正気に戻る。一週間の間、謡をや

驚き。深呼吸。安藤氏（十六回生）の笑い顔。舞台の後（あと）での戸田さん（十六回生）の讃辞……

それに反して、専門課程へ入ってからは、私は「四大学」から遠のきました。三年生の時の「四大学」は個人的な理由で欠席しましたし、四年生の時の「四大学」も出席はしたものの、積極的な参加ではありませんでした。

だから、「四大学交歓謡会」の問題点などを論じる資格は、私には無いかもしれませんが、それさえも無視する厚顔さで「四大学」というものを評価するならば、それには「物足りなさ」があったような気がします。勿論、それに参加する場合、他の行事や謡会と同様、予めその主旨とか、参加の意味とかを先輩に尋ねたわけでもない、自分自身で認識したわけでもありません。しかし、人間にはどんなものにも、それに対して行動する場合、「何かを得たい」という潜在意識があって、それに報われない時、初めて、その意義とか意味とかを考え始め、それらを自分の欲求とか希望とかに結びつけて定義したがる習性があるように思われます。そして私の「四大学」に対する態度というふうなものも、その様な過程を経て、現在に至っていると思います。

つまり、初めは何となく参加していたが、時が経つにつれて（他の謡会等をも含めた時間の経過）、ただ謡と仕舞だけというものに不満を持つようになったという一個人の過程。

そして、「四大学」の主旨を明らかにして、我々がそれを認識して参加するか、または、交歓会の形式を違えたものにすれば、一層充実したものになるのではないかという意見。

しかし、その不満も他人には不満ではなく、その主旨も、謡と仕舞の発表の場を与えるものというのであれば、議論の余地はないというものです。

確かに、謡会の発表形式の特異性による時間的な長さから考えれば、

っている、という事を除けば、まるで原始人の生活である。一日食事を三度する。朝早く起きる。昼にはちゃんとお腹がすいている。夜はグツグツリ疲れて睡をむさばる。殆ど一日中宿を出ないから、晴れようが降ろうが、若干光線の明度に違いが生ずるだけである。こんな敷奇な生活は滅多にできるものではない。

外界とは殆ど没交渉である。朝日ジャーナルに、若し革命が起つたらとして、全学連各派の反応を一覧表にして風刺してあった。例えば、（民青——代々木に連絡してみたが、ちががあかないので、荷物をまとめてかぎをしめ、押入れの中にかくれる）（フロント——「革命に関するティーチンを開くため、講師依頼の電話連絡に忙しい）などである。ここに風韻会部員を入れてみるとどうなるか。恐らくこうだろう。（風韻会部員——合宿が終わるまで革命を知らなかった）私の経験では、ニユースといえ、波切で相次ぐ飛行機が落ちこちた事である。その他はとんと外界で何が起っていたか記憶がない。

一週間観音堂で起伏した。被部の合宿は忘れ難い。破れ障子に線香の臭い。自分達の手で切り回した合宿。もつとも私は決して積極分子でないから、切り回したといっても知れているが、それでも、それまでになく合宿期間が短いのを感じたものだ。小豆島でもそうだった。どうせやるなら忙しい程結構だ。合宿期間中の三年生のスケジュールときたら、殺人的なものだが、それが結構、昨春の教育実習のための訓練になっていたのには感謝している。南部で八畳位の部屋に十人以上も寝た時には風邪一つひかなかつた我身の健康を祝福したものだ。とにかく毎晩寒さにふるえ上がっていたのだから、建て物の一番良かったのは誕生寺だ。その代わり食事には皆閉口した。おまけに女子部員は風通しの悪い庫裏の二階に追いやられたから、建物の恩恵にはあずからなかった。

何や彼やを書いたが、合宿といえどとにかく思い出すのは足の痛

きである。それからノド。だがこれについては何もいうまい。みんな強烈すぎるほどの記憶と実感を持っているのだから。合宿明けの朝は何とも言えない。半徹でトランプをやった目に朝日がまぶしい。頭はもとより空しい。声もない。無粋な部員の集団も一つの別れとなると、どの合宿地でもドラマを感じていたものだ。いつまでも手を振っていたいような。

追い出しハイキング

P17 福山和子

卒業する身から言えば遠い昔のことに思われるが、一年生の時の追出しハイキングは高雄の紅葉狩であった。紅葉狩と言っても、丁度休日ではなかつた。人の波におされてかんじんの紅葉を見るどころではなかつた。謡のなかにもある「清滝川」とはどんなに清流で、趣深い川であろうかと期待していたが、何のことはない、そこには人が歩いていないというだけの一段低い石ころがころがっている場所すぎなかつた。それでも、お寺の縁側にすわって遠くの山々をながめていた時は趣深かつた。そして芥川さんと深刻に話をしたものであつた。お弁当を食べる時、床几に腰かけたが席料を支払わなければならぬという、そのガメツサに姫路から出てきた田舎者は驚いたものである。かわらけ投げというのをみんなやったが、谷にかわらけをとばしている景色はほほえましかつた。植田さんが一番遠くまでとばしていらつしたようであつた。芥川さんもわりに遠くまでとばしていたので本人は鼻高々、私ととばすとすぐ近くに落ちてしまつたので、これも運動神経の問題かと少々ガツカリしたようなわけである。途中で綿がしを買って道々食べながら歩いたが、

もうこれからはこんなことも出来なくなるであろうと学生生活に名残りがおしい気持ちでいっぱいである。二年生の時の追出されるハイキングは森林植物園であつたが、私は足にケガをしていた為に行かれなくて残念だつた。三・四年の時は幸いにしてシニアにいた為に行き出されずハイキングのことは知らない。

秋季発表会

B17 野田和則

神戸大学風韻会秋季発表会も今年で第四回を迎え、その内容もますます充実したものになってきた。これは現役部員の努力とともに宇治先生を始め諸先生方、それに先輩各位の絶大な御支援のおかげである。つまり全風韻会人がこの会を盛り上げていると言える。幸いなことに私は第一回からこの会を経験してきたので、以下その思い出を書いてみることにする。

〔第一回発表会〕 S 40、11、29

第一回のことでもあり、我々部員一同張切つて練習に励んだのであるが(もともと私は一年生で出演させてもらえなかつたので、余り練習しなかつたが)、顧問の楠木学長急逝のため中止され、追悼の謡会に変更して行われた。その頃私はまだ謡曲の面白さなど全く分らなかつたし、また一年生は出演させてもらえなかつたので、始つて一時間もするとエスケイプしてしまい、今思い出そうとしても全く何も思い出せないのが実情である。とにかく何も分らないうちに第一回発表は終つていた。

〔第二回発表会〕 S 41、11、12

完成間もない学生会館での発表会であり、また今年から一年生も

出演するようになったため、部員一同この会にかける意気込みはずさまじいものであつた。狭い部室はそれこそ足の踏み場もない程で、仕舞の練習をするもの、謡曲の練習をするもの等で、その声は六甲台中に響きわたつた(これは少しオーバーである)。もちろん私も皆に負けまいと練習した。この時私は始めて舞台で仕舞「春菜」をしたが、あがつていたのかどうしても最初の言葉「老木も若緑……」が出て来ず、しばらくは立往生、日頃強心臓を誇る私もこのときは冷汗びっしょり。やはり仕舞は舞台馴れが必要だなと痛感した。

〔第三回発表会〕 S 42、11、18

入部して早や三年、幹事学年となつた私は、今までは単に受動的に会に出演さえしておればよかつたのが、今度は自分達が中心になつて会を運営して行かねばならない立場になり、この発表会に対する取り組み方も一・二年生のときとは異なるものであつた。当日私の役は発表会の後の慰労コンパの司会であつた。どういうわけか分らないが、一年生の時以来当てるがわるい役はコンパ役ばかりであり、品行方正、真面目人間を自認する私(ホント信ジテ下サイ)は不本意で足りない。当日は非常な盛会で、宇治先生を始め諸先生方、諸先輩方がにぎにぎしく御出席下さり、その司会は大変骨が折れた。

〔第四回発表会〕 S 43、11、16

この発表会で、私は四年間の風韻会生活の総決算とも云うべき舞囃子「紅葉狩」をやらせていただいた。舞囃子をやることは春から決つていたのであるが、夏休みは旅行、その後、前期試験、さらにゼミ旅行と多忙な日が続いたので、結局練習を始めたのは10月20日頃であつた。初めて楠六へ練習に行った日、先生から「急いで覚えな」と発表会までに間に合いませんよ」と言われて、のん気な私も若干どころか大いにあせつた。それもそのはず、一緒にやることになっている人達は皆相当できており、中にはもうホボ出来上つている人もいたのであるから。その日から必死の練習が始つた。先生の動

きを少しでも見落すまいと、全神経を集中させて先生の動作をみた。そしてそれを忘れないうちにノートに書いておいた。先生も機会ある毎に教えて下さつた。それでも足りない所は湯朝、向浜君等に教えてもらった。このように宇治先生を始め友人諸君の御指導のおかげで、なんとか会の一週間前には一通り出来る様になつた。しかし考えて見れば二十日足らずの練習で満足な舞囃子が出来るはずがない。当日思わぬ所からボロが出てしまった。それは中々舞が終つて心の中で「もう大丈夫、これで安心だ」と思つたとたん今までの緊張がゆるみ、「絶えず紅葉……」の謡の出るところを間違つてしまひ、その上、最後を十分引っぱらなかつたため、地謡との間があいてしまひその間立往生、その時程私は困つたことはなかつた。舞台上で一人きり、どうすることもできずただ立ちすくむのみ、終つて控室でくさつていると、先生が「始めてであれだけ出来れば結構です」と言つて下さいましたが、やはり発表会前のつけやきの練習ではダメ、十分に腰を落ちつけた地道な練習こそ肝要であるとひしひし感じました。

以上私の四年間の風韻会生活を秋季発表会を中心に書いてみました。最後に四年間御指導いただいた宇治先生に感謝するとともに、神戸大学風韻会の発展を心から祈ります。



コンクール

B17 高橋雅晴

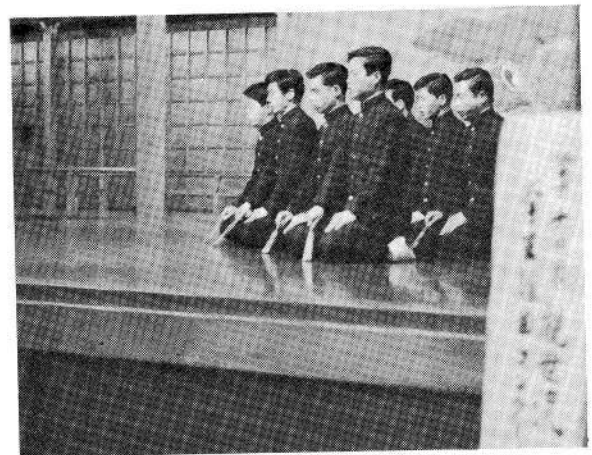
過去三年間、我々は先輩のコンクール出場を観客席から見てもきた。我々の興味の対象となったのは正直な所順位だけでした。実際にコンクールに参加していない者にとっては当然のことかもしれない。先輩からは順位はあくまで二義的なものにすぎず、それに至るまでの過程が大切なのだと教えられ、頭の中ではそのように理解できても、現実には順位のみに関心がひきつけられました。コンクールにそれ以上の積極的な意義を見出すことはできませんでした。そのためかコンクールに向っての練習に入ってから最初の数日は何か乗り気のないものでした。しかし宇治先生にほんとうにじかに御指導いただくうちに考え方が変わってきたように思われます。曲は「善知鳥」で枚数にして二枚にならない短いものでしたが、そこに含まれている謡の深さは我々の到底及び得ないものでした。練習中に「上手に」謡ってやろうという気持など少しもおこりませんでした。実際そんな余裕などまったくありませんでした。先生の御指導に一通についていくというのがせいっぱい状態でした。しかしそのような練習の過程の中で我々は肌で謡の真髄といったものに触れることが出来たような気がします。一字一句たりとも力を抜いて謡うことは許されません。正に全神経を集中して全身で謡わなければなりません。そうして初めて謡らしい謡が生れることがわかりました。それまで自分の生半可な謡を反省する機会が与えられま

した。他の人の謡を聞いたり、又能を見るのにこれまでと違った態度で接することができるようになりました。コンクールの練習に参加して初めて、過去三年半では経験できなかった「真の謡」に肌で触れ、経験できたように思われます。

これがコンクールのもっているというよりコンクールに至るまでの過程のも

っている積極的な意義であったように思われます。その結果順位ということが心の隅に少しは残っていましたが、気持の整理もでき練習での成果を舞台でぶつけてやるんだという気持でコンクールに臨むことができました。終ったあとの爽快さはいうまでもありません。

末尾ながら宇治先生の熱心なる御指導に心から御礼申し上げますとともに、コンクールは十二月十四日、大阪能楽堂にて催され、我々は十五校中第五位であったことを御報告しておきます。



教育学部風韻会に思う

P17 芥川美和子

四十二年の十二月、教育学部学舎が赤塚山から六甲台へ移転いたしました。以前教育学部が神大から分離されて兵庫学芸大になる等という声がささやかれました。私達教育学部の学生は本気になって心配したものでしたが、今、六甲台に冷暖房完備、エレベーター付きの立派な学舎ができ、窓から海が見える所で神大教育学部生として学べる事を喜んでおります。そして教育学部風韻会も六甲台に移り、今までの赤塚山教育学部風韻会と様子が異なってくると思えます。それで今一度、教育学部風韻会を見つめてみたいと思えます。

教育学部風韻会とは神大風韻会の支部でもあり、又、教育学部としてのサークルでもあります。それは、教育が赤塚山にあるという物理的条件により、又風韻会P生の人数が多いので、集まる所がほしいということから、場所獲得のため一つの教育学部風韻会を作ったと聞いております。やがてそれがP学部のサークルとしての特色を出そうじゃないかという事になり、P学部サークル連合に入り、予算をもらい、P学部独自の活動を行う様になってまいりました。

我々が一年生の時は四年生のYさんという一人の大将がいて、Pの部員も多く、支部と言うのではなく、何かまるでP学部風韻会が一つのサークルの様な感じがしておりました。現在の様に土曜日毎の合同練習もなく、大学祭とか、コンパとか、秋季発表会の練習等でP学部の上級生と顔を合わす程度で、四年生の方達がとても怖い存在だった事を覚えております。(それに比べて今の四年生の怖く

ない事!!)しかし年と共に風韻会は一つと言う気運が生じ、現在の一年生など風韻会は一つと言う言葉すら知らないのじゃないかと思うくらいになってしまいました。

私達十七回生で幹事学年になった時、P生が女子ばかりなので、上級生の方達から、大いに心配されたものです。いろいろ理由からだったのでしようが、血気盛んな当時の私達P生女子四名は、ちくしょうノムと思ったものです。その春の頃、一時P学部風韻会は独立してしまっただ方がいいのではないかと思っただけです。P学部のサークルとしての活動や本部との連絡の不行届などで、本部と調子を合わせるのが面倒臭く思われたからです。実際本部との連絡はなかなかうまくいかなかったものです。本部へ練習に行けばいいではないかと思われるかも知れませんが、時間的に無理なんです。私達P生の練習はあのプレハブの部屋では声をあげられませんでした。家政科の調理室を借りて行ったのです。Pタイルの上に、ござやじゅうたんを敷いてその上に座るのです。始めは異様な感じがいたしました。すぐに慣れてしまいました。慣れとは恐ろしいもので、人間慣れると何だかって当り前の様に思ってしまう様です。六時半頃まで練習をし、しびれた足をさすりながら、水道・ガス・戸閉りを点検し、鍵をかけ、玄関横へ鍵を返し、まっくらな冬の中を寒さと飢えのためにふるえる体に暖をとるため、あのP学部前の坂を走って降りたのも、今では懐かしい思い出になってしまいました。話を元に戻しますと、P学部風韻会が独立すると、人数は少ないし、資本(?)はないし、同好会の様になってしまうのであります。発表の場も僅かになりますし(これは結果的に良いのか悪いのかわかりませんが、とにかく張り合いがなくなるのは事実であります。)結局、全学部風韻会あつてのP学部風韻会だと思ひ直し、本部に調子を合わせる事に努力をいたしました。P学部風韻会独自の活動の

中で、よくもめたのは、赤塚山祭であります。それに近教ゼミ(近畿教育系学生ゼミナール)の前夜祭の出演。赤塚山祭はP学部生として参加するのが当然なのですが、毎年風韻会の秋季発表会と重なってごたごたとしたものです。近教ゼミの時に見られます様に、私達がいとも困惑するのは、P学部風韻会が他のP学部サークルとは性質を異にする事なのであります。他のP学部サークルはP学部という事をベースにしているのです。故にその活動は教育追究なのであります。だから私達P学部風韻会は、赤塚山祭シンポジウムや学部合宿にサークルとして参加することはできないのであります。しかしながら、サー連予算だけは、サー連の会計となつて他のサークルのお尻をたいて、もらつておりました。これが矛盾に近い行為だと我々は気がつきながら気がつかぬ振りをして。

又、P学部風韻会では小面という能研究誌を発行してまいりました。始めはどうもこういう事を好かなかった我々十七回生P生女子四名も後輩に伝えるために続けようじゃないかという事になり、図書で本を借り、何とか原稿を作つたものです。が、現在、雑誌「ザ・ふういん」が能楽研究誌的になつてまいりましたので、小面の存在の必要性も薄れてまいりました。だからもう小面と「ザ・ふういん」を全学部能研究誌として一つにまとめれば良い様な気がいたします。

それからP学部風韻会だけ行った遠足。U氏という良き案内人というか引率者(?)に率いられ、京都や奈良へ行き、適当に集団で拝観料をごまかしたりして、悪の喜びを味わつたりしたものです。それから、豚汁によるコンパ、先輩が急にみえてあわてたコンパ等いろいろ思い返すと全学部風韻会という、大所帯の中では味わえなかつた小人数の家族的サークルの味を知つたのもP学部風韻会に於てであります。しかしながら現在、だんだんクラブ内でのP生の数も減り、六甲台へ移つて部屋は確保したものの、私達十七回生が思

うP学部風韻会というものはなくなつてしまふのではありますまいか。これでやつと風韻会は一つという事が達成されたのであります。が、私達、赤塚山P学部風韻会出身者にとっては少し淋しい様な気がします。しかしこれからもP学部風韻会が支部として存続する限り、P学部のサークルであるという特色を生かして活動していただくたく思います。

喫茶

フローレンス

神戸市灘区阪急六甲駅山側

あしあと

昭和四十三年度一

〔三月〕

三日(日)十日(日) 春季強化合宿

於香川県小豆郡土庄町小部

練習曲「賀茂」「養老」「熊野」「巴」「屋島」「葵上」他十
六曲

連日のどを枯らしての猛練習だったが、寒霞溪へのレクリエーションもあり結構楽しいものであった。前田先輩が参加され練習成果についての批評などをうかがつた。

二十三日(土) 十六回生歓送誼会

於学生会館ホール

終曲後食堂にてコンパ

本年は男子十一名女子三名、計十四名という多数の四年生を送つたわけだがそれだけに淋しさもひとしおであった。そして我々現役としての責任も痛感したわけである。

〔四月〕

十四日(日) 凌霜誼会 於松泉館「巴」ほか

二十八日(日) 学連月並会 於関学

新入部員による合同連吟「紅葉狩」「羽衣」ほか

〔五月〕

四日(土) 三大学合同誼会 於上田能楽堂

舞囃子「敦盛」(向浜)「雲雀山」(西村) 連吟「熊野」素謡「天鼓」など合同素謡「鶴亀」「清経」

十二日(日) 宇治風韻会 於大規模楽堂

連吟「安達原」ほか仕舞

十五日(水) 大学祭前夜祭 於神戸中央体育館

連吟「小督」仕舞「高砂」「田村キリ」「東北」「放下僧」「天鼓」

十八日(土) 大学祭文総デ、サークル発表

於学館ホール

素謡「経正」ほか仕舞十番

十九日(日) 大学祭園遊会「狸々」開店

於六甲学舎前庭

名物「串カツ」もその美味が知られ始めたのか売れゆきは好調であった。また多数の諸先輩も来られ忙しい中にも実に楽しき一時だった。

三十一日(金) 二日(日) ジュニア合宿

於摩耶山天上寺王蔵院

〔六月〕

十五日(土) 学連春季大会 於上田能楽堂

連吟「放下僧」「橋弁慶」仕舞「草子洗小町」「花月」「玉響」

「松風」

三十日(日) 慰問誼会 於神戸養老院

初めての試みであったが大変喜んで頂いた。

連吟「養老」「雲雀山」ほか

〔七月〕

七日(日) 四大学交歓会 於湊川能楽堂

舞囃子「小督」(湯朝)「雲雀山」(梶川) 素謡「殺生石」仕

舞「嵐山」「俊成忠度」「屋島」「松風」

同日ジュニア祭 サークル発表 於学館ホール
素謡「土蜘蛛」連吟「紅葉狩」仕舞「羽衣」「熊野」「紅葉狩」
中旬文化総部リーダートレーニング 於明石
参加者、川辺利招(B19) 高島千明(S19)の二名

(八月)
二十七日(土)～九月三日(金) 夏期強化合宿

於長野県北安曇郡白馬村民宿「中屋」

暑い夏を涼しく...というわけでかなり気持ちよく練習できた。五十嵐・植田両先輩が参加された。きびしい練習風景:

練習曲 「経正」「小督」「猩々」「井筒」「三井寺」「船弁慶」「天鼓」「東北」「海士」「忠度」他十八曲、地合わせ

「田村」

(十月)
二十六日(土)～三日(金) 三、四年強化合宿

於六甲台部室

秋季発表会にそなえて舞囃子の地、仕舞などを中心に練習

二十六日(土) 古典芸能合同発表会 於学館ホール

連吟「井筒」仕舞「高砂」「清経」「敦盛」「草子洗小町」

「桜川クセ」「放下僧」

(十一月)

十六日(土) 第四回秋季発表会 於学館ホール

宇治節範、藤井会長、荒川、福光、松原諸教授、井口、青木諸大先輩、原、佐々木、五十嵐、屋島、高木、吉田孝、古田健、上野、内海、戸田、小原の諸先輩多数の参加を頂き、又立派な敬舞台を使わせて頂き大変なる盛会であった。終曲後食堂にてコンパ

主なる番組、舞囃子「敦盛」(辻)「紅葉狩」(野田)「胡蝶」

(酒井)「融」(高橋)素謡「俊寛」(シテ荒川祐吉、ワキ松

原貞吉、ツレ福光家慶、同湯朝)素謡「清経」(シテ尾島洋三、ワキ高木一、ツレ内海隆彦)素謡「三井寺」(シテ原敏郎、ワキ吉田孝平、ワキツレ戸田美代子、子方小原洵子)素謡「千手」(シテ青木又雄、ワキ藤井茂、ツレ井口宗敏)独吟鉢木(藤井茂)仕舞屋島(宇治正夫)...

(十二月)

七日(土) 学連秋季大会 於大阪能楽会館

附 連吟コンクール

連吟「半部」仕舞「難波」「田村キリ」「玉鬘」「羽衣」「杜若」「雲雀山」

コンクール「善知鳥」五位

原、五十嵐、尾島、吉田孝、吉田健、戸田、小原の諸先輩が応援にきて下さった

二十四日(火) 語納会 クリスマスコンパ

於教養部休養室



昭和四十四年度新幹事紹介

来年度の新幹事は左の様に決まりました。皆様の御指導ならびに御協力をお願い致します。

幹事長 川 辺 利 招 (B19)
副幹事長 武 内 安 雄 (A2)
定 秀 富美子 (L19)
会計委員 根 岸 義 明 (E19)
学連委員 田 中 耕 一 郎 (B19)
岩 本 美代子 (P19)
文総委員 谷 村 鉄 郎 (B19)
賀 川 美恵子 (P19)

幹事長就任のあいさつ

川 辺 利 招

安易な気持ちで引き受けた幹事長にいざ就任ということになって初めてその責任の重大さを感じているようなのんき者の私ですが、風韻会のために精一杯の努力をしたいと考えています。

神戸大学の一文化サークルとして、古典芸能たる能を追求することによって特徴づけられるサークルとして、風韻会はどうあるべきなのか? 毎年討議されることながら、そう簡単に結論の出るわけのものでもなく、またその年々によって考え方も異なるようです。さらに最近では、学内外における紛争とも相俟って、サークル員各自のサークル意識の欠如が問題となってきました。

今年、そうした風韻会の方向性を考える上で、内部におけるサークル意識を高めることを第一の課題にしたいと考えています。また風韻会の日常活動の中心に置くべき謡曲・仕舞においてもけじめのある練習でもってその技術的向上をはかり、さらには能の学問的研究をもできるかぎり取り入れ、いわゆる能追求の過程における人間形成をめざしたいと思います。

こうしたことがどこまで実現できるかは疑問です。しかし、サークル員各自が活動に対し主体的に取り組むことで、かなりの程度まで可能になるのではないのでしょうか。

最後になりましたが、諸先輩方の御指導と同輩・後輩諸君の御協力、心から御願いたします。

編集後記

毎年度末の総括として、回を重ねて発行されてきた「風韻」も今回で「第九号」に相なりました。形式的には従来のものをうけつぎましたが、その中に新しい何かへの胎動を少しでも読みとって頂ければ幸いです。

財政的な困難は今回もわかりありませんでした。そのため、広告も掲載致しましたが、未だこれを解消するに十分ではなく、名簿は謄写版印刷に致しました。多少お見苦しい点御了承下さい。

最後に、編集に御協力下さいました皆様、どうもありがとうございました。(湯朝)

編集委員

- 湯朝 憲之 (E 17)
- 高橋 雅晴 (B 17)
- 中島 克己 (E 18)
- 菊地 侃 (B 18)
- 根岸 義明 (E 19)
- 武田 京子 (L 19)
- 河野 豊 (B 20)
- 中村久美子 (P 20)

昭和44年3月20日 印刷
 昭和44年3月25日 発行
 発行所 神戸大学風韻会
 神戸市灘区六甲台町
 印刷所 青野出版印刷KK
 神戸市灘区將軍通4丁目84
 電話(0)4089(0)2838

<p>本とレコードと コーヒーの店</p> <p>宝盛館本店</p> <p>阪神御影駅南 TEL(84)1145代</p>	<p>KK あかね書房</p> <p>阪急六甲駅前 電話(84)2640</p>
<p>灘の名産高級奈良漬</p> <p>東神漬</p> <p>東神興業株式会社</p> <p>神戸市灘区友田町3丁目5の7 電話 神戸(85)5754・4306</p>	<p>舞台撮影・婚礼スナップ・茶席華道・ 出張撮影 商業美術写真・複写・カラープリント</p> <p>川上写真研究所</p> <p>神戸市灘区森後町2の1の64 電話(85)4915番</p>
<p></p> <p>神戸・灘上野通3丁目 / TEL87・1389</p>	<p>皆様の書齋</p> <p>南天荘書店 本店 国鉄六甲道駅山側 電85・5725 六甲店 阪急六甲駅ビル二階 電87・0130 大阪店 梅田新阪急ビル二階 電06・341・7269</p> <p>中央堂書店 神戸・灘中央筋商店街 電86・5166</p>
<p>お好み焼・そば焼</p> <p>山 麓</p> <p>TEL(85)3062</p>	<p>喫茶 軽食 ベンガル</p> <p>神戸市灘区六甲台町(神大前) TEL(87) 5622</p>